

昭和五十二年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野八忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポラ幢ケ谷九〇四 電話(03)37714649 FAX(03)37714649
振替 東京0158431 労金 東京労金本店No50234

購読料 月額400円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■ 巻頭言 ■

自民党崩壊、労戦再編成

二つのパンフレットに思う

続・我等はいま、何をなすべきか

——「周辺部」の反乱を「基軸部」へ(一)——

◇ 灰原茂雄氏と語る (一) ◇

『三池と向坂教室』、編集を終えて

期待ふくらむホワイトハウスさんのバイオリン

——DDR建国四〇周年記念コンサート——

九月九日に全労協準備会結成大会

「ヤルしかない」⑩ 「全労協」を統制する?!

あらゆる分裂主義から

六〇万日教組を守りぬこう

読者からのおたより

号外「われら今、何をなすべきか

——都議選、参院選総括と展望

発行とご購読のお願い

2

3

8

12

14

15

17

16

14

旬刊 社会通信

NO. 413

一九八九年九月一日

一九八九年九月一日発行

(毎月一日・二日・三日三回発行)

■巻頭言■

自民党崩壊、労戦再編成

二つのパンフレットに思う

急速な自民党支持基盤の動揺と崩壊、それにもなう自民党の大凋落。他方、政治のあり方と直結する労働運動は、連合が総評を吸収合併することによって再編成される。第二次世界大戦後四四年、「歴史的転換の時代」への突入である。

戸惑いも多い。はじめて経験することなのだから当然だが、その戸惑いの中心は、これまで社会党が前進するとき、必ず総評労働運動の高揚があったが、今度はそれが無いことだ。「四点セット」が起爆剤となり、選挙で国民は「永田町政治」の論理を拒否した。だが、労働運動の領域では、連合誕生に示される「永田町政治」の論理が大手を振ってまかり通っている。その違和感がそうするのである。

総評官公労を吸収し肥大化する連合は、国民が拒否した「永田町政治」の論理にたいし、おそらくチェック能力を発揮しえまい。ある新聞で読売新聞の論説委員会が、「連合勢力と社会党との間には、決定的な相違がある。それは、社会党が『反対党』体質なのに対して、連合は、その本来の目的からして『政権参加』への強い意欲をもっているということだ」と述べている。この指摘は面白い。というのは、連合は労働組合とは名ばかりで、その根本は企業論理と「反共」体質で塗り固められた企業エゴの集合体であるからだ。もしこうした性格をもつ連合のさばり、政治に影響力をもつことになれば、意識的であるか否かは別にして、労働者階級が自民党政治の論理を補充することにつながる。

そこで問われるのは、労働運動の領域における「密室政治」、いわゆる「永田町政治」の論理を拒否できるかどうかだ。この準備は今のところ、まったく不十分だ。鉄鋼労連は七月五日、「第二回総合意識調査」を発表したが、それによると自民党支持一四・七％（前回一六・四％）、社会党一一・一％（同一〇・六％）、「支持政党なし」五九・九％（同五四・六％）。また、これと同時期におこなわれた商業労連の意識調査では、自民二〇・五％、社会七・四％、民社二・〇％、支持なし六〇・七％。民間基幹産業労働者の意識がきわめて立ち遅れていることは明らかだ。

他方、彼らにも大きな意識の変化がある。労働組合不信の傾向がいちじるしく高まってきたことだ。さきの鉄鋼労連の調査によれば、鉄鋼労連への信頼度はプラス評価三四・八％（「満足」三三・一、「ある程度満足」三〇・一％）、マイナス評価六三・〇％（「大いに不満」二一・五、「やや不満」四三・六）でマイナス評価がプラス評価を大きく上回る。ダラ幹諸氏にとっても自民党は人事ではあるまい。

このようなとき、絶好のタイミングで二つのパンフレットが発行された。一つは国際労働運動研究協会（岩井章会長）から発行された「官民統一『連合の進路』批判—労働戦線再編論の正しい理解のために」、二つは教育労働運動通信編集委員会（坂牛哲郎代表）から発行された『連合の進路』と日教組の進路—教育労働運動通信第一五号」である。

労戦が最後のヤマ場にさしかかった今、この二つのパンフを糧に、日教組、自治労の仲間が奮闘することは、「四点セット」が自民党支持基盤を掘りくずしたように、連合の基盤を突きくずす、そうした役割と結果をもたらすであろう。

続・我等はいま、何をなすべきか

——「周辺部」の反乱を「基軸部」へ（二）——
立ち上る女性層——周辺部のたたかい

八十年代に入り、この生活保守主義が、根底から崩されそうな状況が生れてきた。それは、「会社の門をくぐれば民主主義はない」というほどの、労働者抑圧、合理化の進行だ。労働者は、激しい競争にかりたてられ、心身ともに搾取される。都市周辺の労働者、サラリーマンがマイホームに辿りつくのは、十時過ぎ。妻は、パート労働で疲れ、床についている。子供は塾から帰って、受験勉強。鎌田慧のいう「孤食の時代」である。

合理化、競争主義は、労働者本人だけではない。子供も競争主義にまきこまれ、塾通い。その資本かせぎのため、妻のアルバイト。家庭生活はスタスタに引き裂かれ、崩壊寸前にある。

それだけではない。電力労連は原発を推進する。合化労連は公害防止には、みむきもしない。農産物、水、環境の汚染がはじまる。家庭を守る主婦は、生きてゆくためたたかざるを得ない。生きてゆくため、時給六〇〇円のパート労働に出ざるを得ない。会社で、資本と組合に弾圧され、思想が汚染されている亭主はほとんど家庭防衛の役にたたない。このような状況が、全国的に生れてきたのが、八十年代である。基軸の階級闘争が衰退したため、矛盾が、周辺部、家庭、地域で爆発してきたのである。まだ資本に取りこまれることなく、家族のいのちをあずかっている主婦が、さまざまな市民グループをつくり、いのちを守る運動を開始したのである。

女性意識の高まりといっても、その中にも、当然階層がある。ブルジョア社会の成長に伴い、いわゆるキャリアウーマンの階層が生れてくる。この層は、性差別、政治の前近代性に対しては容赦しない。男女差別撤廃運動の先駆的役割りを果たしてきた。しかし、重視すべきは、激増するアルバイト、臨時工女性である。差別、選別されても働かざるを得ない、この女性が、組織化されるときは、巨大な力を発揮することになるだろう。

中小零細商工業者、農業切り捨て

この層は、資本主義の発展、成熟につれて、大資本に圧迫され没落してゆく、いわゆる小生産者層である。没落の危機に頻しているが、旧世界にしがみつぎ、上昇の機を狙う、最も動揺する層である。

自民党は、この層を最も固い支持層として取りこんできたが、八十年代に入り、第二臨調・行革方針のもと、農業、中小零細企業切り捨て政策をすすめてきた。農業関係予算の一般会計に占める比率は、七五年九・六％、八〇年七・二％、八八年四・三％にまで低下してきた。八六年ダブル選挙後、二年連続米価引き下げ、八七年農業総産出額は、前年比七・五％減少である。八八年には、でん粉、粉乳等一〇品目、牛肉、オレンヂは三年後、自由化を決定した。米についても、なしくずしの自由化の方向にある。農民が異口同音にいつているのは、「選挙めあての場当たり農政によって、ここまで追いつめられてきた、この先どう生きてゆけばよいか見通しがない」ということである。

八十年代後半の円高は、下請け小零細商工業者を直撃した。大企業は、下請業者に犠牲

を転嫁し、血をしぼり出すような合理化を強制した。倒産件数は、毎年一万以上、最高値を更新している。今年度に入り日米大資本の要求を受けて、大型店舗規制法撤廃・商法改正による帳簿公開、会社設立限度資金の引き上げを意図したが、国会の混乱でのばされている。

今次選挙における、農民、中小零細商工業者の反乱は根が深い。長期にわたる切り捨て政策のうらみが、消費税・リクルートで一挙に爆発したとみるべきである。小生産者の組織化は、いずれの国の政治変革においても最大の難事であった。この層への働きかけは、公明、共産党に比べ、社会党は圧倒的に弱い。大きな課題となるだろう。

支配機構再編成——戦後政治総決算

三点セットプラス女性蔑視は偶発的な失政ではない。女性蔑視は、自民党政権前近代性の一証左に過ぎない。三点セットは、産業構造再編成の一環として、進められてきた政策である。

日本の独占資本、自民党政権は、バックスアメリカナの崩壊、世界帝国主義再編成に直面している。日本の産業構造の転換、それに即応した支配機構再編成は、緊急の課題であった。

中曽根は八一年、第二臨調、行政改革委員会を設置し、財界代表・土光を委員長にして、この課題にとりくんだ。福祉、民生の切り捨て、軍事費、海外援助費の増強、民活、規制緩和による独占資本の強化等。バックスアメリカナ崩壊に備えての、日本帝国主義の強化政策である。

その中心課題が、総評解体、偽装組合・連合の育成、軍事費GNP-%突破、日の丸・君が代強制、教育改革、土地規制緩和、公害規制緩和、原発推進、安保強化、農業、中小零細商工業切り捨て政策である。消費税は、帝国主義国家として、己の権益、資本を守る、自立した軍事体制確立を内包している。このことは、日米安保条約、アメリカ帝国主義の要求でもある。

これら政策は、「生活保守主義」により、己の生活を防衛せんとしていた、労働者、市民、農漁民、中小零細商工業を直撃した。不満はおりのようにたまってきた。しかし、自民党支持率は上昇する。その最大の原因は、組織労働者の取りこみである。凄じい合理化、首切り配転、長時間労働は労働者の心身をむしばんでいた。しかし不満は行動に転化しない。資本と、変質した労組幹部により、労働者は身体だけでなく、心も奪われ、競争主義の蟻地獄にのたうちまわらされている。「連合」の成立はこの取りこみ成功の、一大指標である。

八六年衆参ダブル選挙は、このような状況のもとで行なわれ、自民党は三〇四議席をとり大勝した。中曽根は、「左にウイングをのばした」、「従来の固い支持層に、都市の柔らかな支持層の取りこみに成功した」と考え、総理、総裁任期を延長し、「戦後政治の総決算」を一気に強行せんとしたのである。基軸の階級闘争は鎮圧されていたが、周辺部の反乱が活発化していたことに気づかなかったのである。

八七年、売上税の流産、竹下政権の成立、リクルート疑獄の発生、消費税強行は、たまりにたまった怒りに点火した。女性、若者を先頭にして、生活保守主義の柔らかな支持層は自民党から離反した。固い支持層、農漁民、中小零細商工業者も自民党をみかぎった。

今次参院選、自民党大敗は、偶発的失政ではない、構造に深く根ざした敗北である。二一世紀にむけての支配体制再編成、前川リポート実施のための、上部構造再編成が、その出発点で、手ひどい反撃に直面した事実をしつかりつかまえておくべきであろう。

支配機構再編——保守二大政党論

今次選挙における自民党大敗、全階層にわたる自民党離反は、たしかに構造的なものである。しかし、この層の社会党結集を、そのままつなぎとめ得るかどうかは、全く別の問題である。そのことは、支配階級の支配機構再編能力と、社会党の組織力、主体強化のからみ合いにより決定される。もしこのたたかいに敗れるようなことがあれば社会党は取りかえしのつかない打撃を受けることになる。一九四八年、片山社会党内閣倒壊後の長期低落。六五年、都議選第一党獲得後の長期低落は、このことを物語る。その長期低落の社会党に起死回生のチャンスを与えた、新しい結集層をどう組織化し、どう党の力量をこの機会に強化するか、社会党は結成以来の重大な転換点にたっている。

既に述べたように、財界は、今次参院選自民党敗北を予想し投票直前から「政権交替可能な、保守二大政党論」を戦略構想として主張している。西側資本主義国家は、日本政治の近代化、二大政党による政権交替への脱皮として、受け止めている。パックスアメリカナ、崩壊のあと、世界帝国主義同盟を支える有力国家として「一流の経済にふさわしい、一流の政治」を、日本支配階級は追求しているといつてよい。

戦後四〇余年、一党独裁により、日本を支配してきた自民党の前近代的腐敗体質は、リクルート疑獄により、全国民に暴露された。発達したマスコミの力により、全世界に報道された「三流政治」の改革は、世界に進出する日本独占にとって、当然の要求である。

利益誘導型金権政治、待合を中心とする密室談合、人物、識見と関係ない派閥序列による総理、大臣ポストの獲得。女性蔑視にみる前近代的感覚。資本主義合理性を身につけた財界人の容認できない古さである。

財界の圧力をうけて、自民党は、さまざまな改革を追求せざるを得ない。ヨーロッパ型の各種団体参加によるネオコーポラティズム等、さまざまな近代化を検討はするだろう。しかし、彼等が追求するのは、あくまで、自民党による日本支配である。六月二十六日、三塚外相は、ホワイトハウスで、ブッシュ大統領と会見した。ブッシュは、「アメリカは制度上、二大政党交替制であるが、国政の停滞は生じない、日本はどうか」との質問に対し、三塚は「そうならぬようベストをつくすが、きびしい。参院選で自民党は過半数を割るだろう。しかし、衆院選ではギリギリ過半数を維持するか、悪くても、中道の協力で、政権維持を図れる」と答えている。

民社、公明をとりこんで、社会党に政権をわたさないのが、自民党の戦略である。しかしホワイトハウスは、社会党分析に踏みこんでいる。日本財界、各商業新聞論調は、二大政党交替論である。社会党の現実政党化、公明、民社、社民連との連合による、二大政党論の追求である。消費税廃止ではなく見なおしを含めて安保、原発容認、社会党の変質である。既述のように、斉藤経団連会長は社会党との話し合いを希望し、社会党の保守化について「連合」に大きな期待を寄せる。各商業紙はほとんど、社会党変質について、「連合」の役割を重視している。「連合」は、一二名中一一名当選、しかも一〇名は一名区で、自民党にせり勝っている。この勢いで、九月準備会発足、一一月新しい「連合」が発足する。

現情勢では官公労そろって、のみこまれる状況である。組織人員七〇〇万、日本労働運動史上、最大の労組となる。この連合が独占資本のこよなき友人として、労働者をかこいこみ、社会党の変質、保守党化、日本支配機構の再編に力を貸すことになるだろう。

一 二大政党のなかみはなにに

二大政党交替論といっても、この二大政党はどんな政策を追求するのか。日本の支配階級は二一世紀にむけて産業構造転換にみ合った支配機構として、保守二大政党を追求しているのである。したがって、その政策は、「前川リポート」の大枠を出すことはできない。日本独占が、世界多国籍企業の激しい競争に生きぬいてゆくためには、この方針の大幅変更は許されない。七月二十七日金丸が「消費税廃止を含めて抜本検討」と発言し、財界、自民党内部の反発をくらい、次の日取り消した事は、このことを示している。財界の追求する二大政党論とは、大枠「前川リポート」の中におさまる政党のことを意味している。その修正の幅の大小により、区別が生ずるにすぎない。

連合副会長、実力者といわれる、山岸全電通委員長は、八月一日、毎日新聞で次のようにのべている。

「今回の選挙は敵失によるものだ、社会党は思い上ってはいけない。政策も運動も体質も従来と変わっていない、有権者はこういう社会党を是としたのではない。責任政党として現実的政策をたてないと、次の選挙でしつべがえしがくる。今後行なわれる政権協議でも社会党は、雅量を以て譲歩しなければならぬ。安保、自衛隊、原発容認は当然のことだ。当面は野党中心の連合政権を積み上げ、少なくとも五年後には、野党再編成をなしとげたい。」

財界の期待をになった連合の本音が、そうとうあけすけに語られている。五年後には「連合党」が二大政党の一翼をになうということである。そのため社会党は、基本政策を転換し、国民の期待に答えよという。

非現実的な現実転換

この主張は、「現実」を旗じるしにしているが、まことに非現実的である。論旨にすりかえがある。「有権者は、こういう社会党を是としたのではない」とし、「基本政策の転換」を迫っている。これは、すりかえである。有権者は、社会党の基本政策、その行動を信頼し、「山が動いた」のである。

既にものべたように、八十年代に入り「戦後政治の総決算」、中曽根第二臨調行革の諸政策は、国民生活を直撃した。凄まじい合理化、家族の分断、原発、公害、農業破壊、中小零細商工業者切り捨てに対する怒りは、つもりつもってきた。これに点火したのが、リクルート、消費税、農産物自由化、女性蔑視ではなかったのか。

社会党が、この政策に反対しつづけてきたことが、国民の信頼をかち得たのではないか。特に、消費税については、土井たか子は、愚直なまでに、「反対」を変えず、参院では徹底抗戦した。このことが、同じ野党でも公、民と、社会党をわけた明暗ではなかったのか。

このとき、山岸は「社会党の基本政策を転換せよ」という。あきれはてた空言である。現実無視もきわまりとすべきであろう。「連合」は基本的に、消費税に賛成ではなかったのか、公明、民社もしかりである。選挙戦で、国民大衆の凄まじい怒りに驚き、あわて

て「反対」に切りかえた事実を、選挙民は忘れていない。

だからこそ、選挙後の四野党会議でも、民社は、財源がどうのと、なんくせをつけ、足をひっぱっている。連合、民社最大の支持労組、自動車総連、電機労連は、基本的に消費税は賛成なのだ。いま、国民の声におされ正面から「賛成」といえなくなったから、物品税に文句をつけ、財源問題で時をかせこうとしている。それだけではない、安保、原発の容認まで迫り、社会党に結集した広範な支持層を裏切らせようとしている。選挙で負けて、国民の支持を失った党が、その党の政策に勝った党を屈服させようとしている。「雅量」をもって、社会党が屈服するならば、社会党に起死回生のチャンスを与えた巨大な支持層は、たちまち社会党を見はなすだろう。何年も待つ必要はない。次の衆院選で、大敗することは明らかである。

社会党のすすむべき道

いま、社会党のなすべきことは何か。山を動かした基本路線に自信を持ち、これを堅持することである。今回社会党に結集した層は、自民党に裏切られた層である。はっきりした自民党との対決を望んでいる。消費税撤廃、農産物自由化反対、リクルート疑獄、女性蔑視で暴露された、土台から腐蝕されている、前近代的政治の粉碎を望んでいる。

いま、社会党にとつて、必要なことは、独占資本と、その手先連合幹部の甘言と恫喝に左右されないことだ。党に起死回生のチャンスを与えてくれた国民各層の期待を裏切らないことだ。その要求を組織化し、「反独占国民連合」の党基本方針を堅持してたたかうことだ。

もし、公、民、連合が、この方針に敵対し、今次国会で、消費税について、あいまいな態度を取るなら、国民大衆はこの党を許しておかないだろう。きたるべき衆院選で社会党の大勝はまちがいない。もし反対に、公民連合にひきつられ、基本路線を転換し、消費税、農産物自由化について、あいまいな態度をとるなら、社会党は取りかえしのつかない打撃をうけることになる。

党幹部、大単産幹部は、日常、大衆と接触しない。財界、官僚、新聞記者、御用学者との接触が多い。そして、敵の工作にのり易い。いまこそ、その弱点を自覚して、地域職場で、資本、官僚とたたかう、社会党支持大衆の声に耳をかたむけなければ、党の前進はあり得ない。

労働者階級解放のために

何回もいうようだが、今次選挙で、山を動かした原動力は、女性、若者を先頭にした都市市民層、中小零細商工業者、農漁民層である。もっとも抑圧され、人権まで犯されている労働者層の反応は鈍く、行動力は衰退していた。

たたかいは、基軸からおきないで、周辺から発生した。なぜなのか。資本、同盟・JC幹部協力による労働者とりこみ、弾圧は、六十年代、民間大企業労働組合を蚕食した。八十年代、中曽根は、第二臨調・行革を設置し国家権力を動員し、官公労取りこみに成功した。「会社の門をくぐれば、民主主義はない」といって、労働者は凄まじい合理化を受け、心身ともに犯されている。心が犯されているということは、頭脳が資本に汚染されているということである。

鉄鋼労連調査（八八年）によっても、賃金合理化に対する不満は増大している。しかし

これが、能力主義管理により、他人をけおとし、能力給上昇を計る競争主義に包摂されてしまう。八八年、連合は三〇歳以下組合員、一万二千人対象の意識調査を実施した。関心ある政党は自民党一八%、社会党一五%である。窮乏化する労働者は、労資による執拗な思想教育、訓練により、資本に取りこまれていく。これが「連合」を成立させている土台である。反自民のたたかいが、女性、中小零細商工業者、農民から生れた理由である。

この労働者の解放なくして、日本の未来はない。「経済一流、生活三流、政治三流」を打ち破ることはできない。社会党は、結成以来労働者階級と共に生きてきた。その労働者が、資本、連合幹部により、企業にかこいこまれ、人権、民主主義を抑圧されている。この労働者の解放をかちとることが、社会党の使命である。

女性、若者、中小零細商工業者、農民は、独占自民党支配の一角を崩した。この高揚を、職場労働者の高揚に結合するのが、我々の任務ではないのか。

窮乏化は、労働者の団結と、反撃を産み出す。しかし敵は、絶えざる思想攻撃、労務管理により、その支配下に再編成してゆく。これを打ち破るのが、協会、同盟員、活動家の任務ではないのか。小生産者層は、独占に圧迫されますますます苦しくなる。しかし、彼等は、本質的に生産手段所有者である。動揺はさけられない。労働者階級が解放され、党の主力となるべき、この層は、反独占の戦列に加わる。一月、総評は解散し、連合は成立する。しかし、けつしてたじろぐ必要はない、つもりつもった職場の不満は、活動家の奮闘により、必ず爆発させることができる。今次参院選はそのことを「周辺部」で実証した。次は、このことを「基軸部」の階級闘争で立証しようではないか。

(坂牛 哲郎)

◇ 灰原茂雄氏と語る (一) ◇

『三池と向坂教室』、編集を終えて

たいへん興味深い本が生まれ出ました。灰原茂雄氏の手で編まれた『三池と向坂教室—向坂逸郎・灰原茂雄往復書簡をめぐりて』(社会主義協会出版局刊、一八五四円)がそれです。

三池のたたかいは総評労働運動そのものです。それだけに「三池」について書かれた書物は、数限りなくあります。そのなかで「三池と向坂教室」の地位をもっともよく訓えるのが、日経連が三池闘争後に発行した資料集『資料 三池争議』です。

今度、灰原さんの手で編まれた『三池と向坂教室』は、これまでの書物とは一味も二味も違った味わいをもっています。三池闘争をめぐる二人の巨人、向坂先生と灰原さんの書簡を中心に、本書は編集されているからです。書簡はいずれも未公開のもので、資料としての面白さはもちろん、本書を手にした読者は、あのマルクスとエンゲルスの往復書簡にも似て、二人の交流のなかに人間として社会主義者としての生き方に大きな感銘を覚えるでしょう。

総評解散の年、『三池と向坂教室』が出版されたことは、歴史の皮肉かもしれませぬ。二人の友情とたたかいを糧に日本労働運動再生に全力をあげましょう。編集部は本書を編まれた灰原さんには話を聞いた。

(編集部)

みんなに支えられてできた本

編集部

りっぱな本が完成しました。一仕事終えられたご感想からうかがいたい。灰原 病氣中にこの本が出たわけです。同志、先輩のみなさんの友情と信頼があればとてもやりとげることはできませんでした。序文を書いていただいたり、解説をしていたり、心からの感謝と感激でいっぱいです。

さらに向坂先生の奥様のお力です。奥様が私からの手紙をすべて、ハガキにいたるまで保管されていました。たとえば「三池政治文化研究会」です。これは私が組合運動をやる前の話で、私自身が忘れておったんです。その「三池政治文化研究会」会則や昭和二二年に何をやったかという詳細なデータがあつたんです。それを向坂先生の奥様から送っていただき、びつくりしました。私自身もすっかり忘れていたことで、手元にない資料でしたから……。

一言でいえば、みんなに支えられてできた本で、私がまとめたということではなくて、向坂先生を忍び学ぶ態度をもった同志、先輩のお力でできたということ、こんな嬉しいことはありません。

ただ残念ながら病氣中で、まだ休んでいるという状況ですから、十分な力がつくせず、いろいろ不充分さがあるとすれば、私の状況のせいだと反省しております。しかしいずれにせよ、この本が出たということは、まさに「一仕事終わった」という喜びを感じています。同時に、先輩、同志のみなさんに心からお礼を申し上げたいし、それだけに一冊でも一人でも多くの人に読んでいただき、向坂先生の生涯を貫く態度を学んでいただきたいですね。

一人でも一冊でも多くの人に

編集部 「一仕事終えた」というより、編集作業のなかでさらに闘志を燃やされたわけですね。

灰原 (編集作業のなかで) 不充分さ、足りなさをいろいろ感ぜさせられました。その意味で「一仕事終えた」というより、これからもっとやらにやいかんと励みになりました。辛い病氣も回復に向かっていますから、「もう一ふんばり」ということを切々と感じていくところです。

くり返しになりますが、その意味で一人でも一冊でも多く読んでもらって、いっしょにスクラムを固めたいということを願っています。

『三池を語る』の続編の気持ちで

編集部 本書の最大の特徴は向坂先生と灰原さんの書簡を中心に編まれていることですね。

灰原 先生のお手紙は私が全部保存しておりました。全部で五〇弱です。私が先生にさしあげたのが一四〇通くらいでしょうか。先生の奥様が年代順に整理し、お送りくださいました。

『三池と向坂教室』に掲載させていただいたのは、先生のが三六通、私のがたしか一〇

四通だったと思います。

編集部 本を読ませていただきますと、一九四八年五月から一九六六年一月まで、約二〇年にわたっています。

それにしても（向坂）先生の出会いから書簡が残っているなんて、すごいですね。私などには想像もできないことです。

灰原 三鉦連時代（昭和三二年）、ソビエトと中国に各一ヶ月行ったときも、ハガキを三枚くらい先生に送ってますからね。お伝えしたいことを一生懸命書きました。

編集部 私なんか、灰原さんからお手紙いただくたびに「こわく」なる。いつも全力投球でいらっしやるから。

以前に『三池を語る』という、これまた立派な本を出されていますね。

灰原 社青同の同志のみなさんとね。私としては、今度の本は『三池を語る』の続編みたいな気持ちです。あのとき、三池闘争を本当に愛着をもって勉強し合ったですね。それが本当に役立ちました。

人間味あふれる書簡集

編集部 向坂先生の書簡を改めてごらんになって、あらためて感ぜられたことがあったと思うのですが。

灰原 人間味あふれる書簡集ということです。感じたことを結論的に申し上げますとね、マルクス主義者をもっとも人間的だということです。よく「科学的社会主義者は、人をもっとも思わない」との批判がいられますね。しかし、往復書簡をみながらマルクス主義はもっとも人間的だということを感じましたし、逆に「人間的でない者は真のマルクス主義者たりえない」ということを、先生の具体的な行動と手紙によるその都度の指導で学ばされましたよ。もういっぺん、感銘させられました。

たとえば先生はこうおっしゃられたんです。ちょっと成功したときには、「油断しちゃういかん。ここでもう少し勉強しなきゃいかん」とおっしゃられたし、負けたときは負けたときで、「これからだ、ここをしっかりとやりやらないかん。勝ったときどうするかより、負けたときどうするかが一番大切だ」とよくいわれましたよ。

「三池に学ぶ会」があるでしょう。第一回を昭和三七年にやっただけです。参加者がたいへん少なくて、そのとき、先生のお宅におられた女性が参加された。そうしますと、先生から手紙がきましてね、「若い女性だから十分気をつけてくれ、夜は早く帰してくれ」、あわせて「三池にいる間は酒は禁止してくれ」と、細かい注意がきてるんです。こんなところにも先生の優しい心使いがありました。

そうかと思うとね、三池闘争の真最中のことですが、「ハエ一匹、ポリ公と違ってたたけ」と、加茂先生（鳥取大学医学部教授）をリーダーにして衛生問題では本当によくしていたのだですよ。加茂教授は足が悪いのに、暑い三池にいらして、チブス予防等に走り回られていたことを思い出します。

大牟田では何十年前か前、チブスがものすごくはやったことがあったんです。先生はそれをよく覚えていらして、ホッパー前の大野戦ですから「こっちは二万人以上、警官隊が一万人以上いるのですから、もしチブスということになればいっぺんに「ピケ隊解散」です。大牟田は生地ですから、このことを先生はよく知っておられ、よく注意されました。

あとから考えれば考えるほど、先生の配慮は細やかでたしかなものだったということ、手紙を通してても所要所で感ぜられます。

その基本は何かといえ、やはり愛情ではないかと思えますね。人間にたいする愛情です。「資本論」もいし、他にいろいろありますが、人間にたいする愛情というか、労働者にたいする期待というものを再び学ばされたということですね。

労働運動に愛情を

編集部 『三池と向坂教室』の往復書簡は灰原さんのが六六年一月二日付、向坂先生のが六五年七月一九日付で終わっています。もう一つの「向坂教室」といえば、七〇年から始められた国労反合研の勉強会がありました。私は当時、労働運動を学び始めたばかりのときで、あまりよく分りませんでした。先生が深夜の一時、二時まで国労の仲間たちと意見をたたかわされたことを、今でもよく思い出します。

灰原 先生は国鉄労働者に期待されていましたからね。一番早くいらして、「君たち遅いじゃないか」ってね。

編集部 本当に国労労働者を愛されていた。当時、和氣さんを塾長とした「向坂塾」に私も通っていたのですが、国労からの学習会から帰ったばかりの先生は、「今日は楽しかったよ」とにこにこ顔だった。

灰原 三池でも同じでしたよ。国労反合研ではお互いよく叱られたですよ。

編集部 叱られれば叱られるほど不思議なことに勇氣がわいてくる。先生の愛情がそうさせたんでしょうね。

灰原 今の労働運動には人間的なお互いの愛情がありませんね。連合の一部の幹部なんかは、ひよっとすると独占資本から差し回されて、いろいろ知恵もつけられ、マスコミ登場の機会も与えられてここまで連合をのし上がってきたわけですから。そのことを考えますと、わが方自体がもっと人間を大事にする作風を強め、マルクス主義を本当に理解した運動でなかったために、ここまで後退させられたことを反省する必要がありますね。

逆にいえば、ぼくら「向坂先生から学んだ、学んだ」というけども、学び方がひじょうに足りなかったと思います。理論的に学ぶだけじゃなく、そういう人間に対する配慮をわれわれはもっと学んでおけばよかつたと思うし、これからもそういう点では総括をしてやり直さなければならぬ点がいっぱいあると思いますよ。

しかし結論的にはマルクス主義者は人間的だ、考えてみればマルクス、エンゲルス自身がそうです。本当に考えてみるとそうなんですからね。同盟とか自民党の幹部にこれっから先もないんだから。中曽根以降の行革やとくに国鉄問題をみてもそうですよ。そういうものにたいする怒りが、先生の労働者に対する友情といえますか、愛情に再び接して、今一度、敵にたいする怒りが、ハラからわき上がってきますよ。

編集部 向坂先生から若い仲間が学んで欲しい点ですね。

灰原 そうですね。われわれが先生から学ばにゃいかなのは、理論的な問題だけじゃなくて、そこるところをこの往復書簡で学んで欲しいと思うし、あとで見て「ああ、先生は偉大だったな」ということを思いますね。

(つづく)

期待ふくらむワイトハースさんのバイオリン

——DDR建国四〇周年記念コンサート——

今年、ドイツ民主共和国（DDR）の建国四〇周年です。そんなわけで、日本DDR友好協会連絡会議ではこれを記念して、バイオリニストのアンチェ・ワイトハースさんと、伴奏者にピアニストのホルネリア・カルベさんを招き、日本各地で国際連帯のコンサートを開こうというのです。おそらく、日本でもこれから知名度の出るワイトハースさんのデビューは信州松本になるのですから、松本のことを含めて、コンサートの紹介をさせてもらいます。

〈日程〉

九月六日 (水)	松本市
九月八日 (金)	青森市
九月十日 (日)	福山市
九月十一日 (月)	福岡市
九月十二日 (火)	東京都

〈プログラム〉

ドビッシェ…バイオリン・ソナタ

ブラームス…バイオリン・ソナタ第一番 長調

—— 休憩 ——

サン＝サーンス…*アバネーズ 作品八三

ショスタコービッチ…バイオリンとピアノの為の四つのプレリュード

サラサーテ…ツイゴイネルワイゼン

* ちらしによると、「アバネーズ」とありますが一般に日本では「ババネラ」と呼ばれているものです。

〈演奏者プロフィール〉

●バイオリンIIアンチェ・ワイトハース

六六年、東独グーベン生まれ。七八年、ドレスデン音楽特別学校入学。八四年、ベルリン音楽大学入学。八五年、ヴェイエニアフスキー・コンクール第一位。八六年、国際ティボー・ヴァルガ・コンクール第二位。八七年、第三回国際フリッツ・クライスラー・コンクール第一位および四つの特別賞受賞。八八年、バッハ・コンクール第一位。

●ピアノIIホルネリア・カルベ

五五年、ラウタ生まれ。六八年、ドレスデン音楽特別学校入学。七三年、ドレスデン音楽大学入学。七八年、ドレスデン音楽大学講師、八一年、ベルリン音楽大学講師、現在同上級講師。この間、バッハ・コンクール、プラハの春国際コンクール、ヴェイエニアフスキー・コンクール等でピアノ伴奏者を努め、又、いくつかの賞を受賞し、チェコ、ポーランド、ルーマニア、ソ連、西ドイツ、スイス、フランスに演奏旅行。

バイオリンのアンチェ・ワイトハースさんの経歴、とりわけ、コンクール歴を見ると、コンサートへの期待で胸がふくらむばかりです。

つい先頃、長くベルリン・フィルと関係が深かった指揮者のフェルベルト・フォン・カラヤンが亡くなりました。西ドイツには、カラヤンの秘蔵子といわれた若き女流バイオリンスト、アンネ・ゾフィー・ムターがいて、十代の若さで、モーツァルト、メンデルスゾーン、ブルッフ、ブラームス等の協奏曲が、カラヤン・ベルリン・フィルと次々にレコーディングされ、日本ではかなり名が知れています。その証拠に、数年前、長野市の県民文化ホールでのムターの協奏曲の夕べは、大ホール（三三〇〇席）を満席にしましたし、瑞瑞しく繊細で力強く、それでいてとにかくていねいな演奏に、私達は魅了されました。前後して同ホールを訪れた世界的なメジャーオーケストラである、ニュー・フィルハーモニー管弦楽団や、ロイヤル・フィルでさえ座席の半分以上は空席であったことを考えると、ムターの人気、知名度は相当のものだと思いました。そして、この満席のコンサートは33ナンバーの県外車が多く見かけられ、この意味も考えてみる必要があるように思いました。

さて、来日されるワイトハースさんのコンサート歴を見るにつけ思うことは、資本主義の国の人だったら、たとえば西ドイツの人だったら、大々的に宣伝されて、日本では相当の知名度であるだろうし、東京で三千元（松本では二千五百円）では楽しむことはとても不可能でしょう。又、そんなことより、東京等でチケットを求められなかった愛好家が、ムターの時のように、信州の田舎街——（今回は長野でなく松本へ）——へ押しかけるということになるのではないかと思うのです。このことは、ピアノストのカルベさんにも当てはまります。

プログラムについてですが、日本人なら誰でも知っているといわれる有名なサラサーテのツイゴイネルワイゼンや、サン・サーンスのババネラが入っているもの、全体とすれば友人好みのプログラムだと思います。私達友好協会連絡会議の仲間を中心に最大限のとりくみをするなかで、DDRからの友人達を迎えたいと思います。

DDRと日本は、長いこと国交がなかったのですが、そうしたなかで日本とDDRの友好に尽力された向坂逸郎先生は、松本の友人である百瀬嘉郎さんに「信州人は自分の生まれたところのことと目の色をかえて自慢するのがくせだ」と語ったことがあるようですが、「道は一筋——向坂逸郎を語る」向坂ゆき編、（社会主義協会刊）、少しく松本の音楽事情と、DDRの関係を紹介させてもらいます。

松本市には、鈴木鎮一氏による才能教育研究会があり、バイオリンを中心とした子供の音楽教育が盛んであるといえます。しかし、良いコンサート・ホールはありませんでした。そしてようやく世界でも屈指の音響を誇るといわれる「音楽文化ホール」、愛称「ザ・ハイモニーホール」が建設されました。この「音文」のオーブニング・コンサートは、DDRの誇る世界のテノール、ペーター・シュライヤーの来松によって開催されました。ペーター・シュライヤーに、音響の良さを聞いたという、ピアノ界の巨匠S・リヒテルが来演し、満場の拍手に三曲ものアンコールでこたえてくれたのは、八六年の秋のことでした。

リヒテルのリサイタルを含む「ソビエト・ロシア音楽祭」には、神童キーシンやバイオリンの名手スピバコフ等の来松がありました。又、この年はJ・S・バッハゆかりの世界最古の市民オーケストラである、DDRのライプツヒヒ・ゲバントハウス管弦楽団の精鋭三五人からなる、ゲバントハウス・バッハ・オーケストラによる、J・S・バッハのブラントンブルグ協奏曲の全曲演奏会は、長野県音楽史上初の試みということで大きな話題を

呼び、その演奏は聴衆の心をとらえました。又、八七年は、松本市制八〇周年の記念事業として、「音文」に県下初の本格的なパイオルガンが設置され、このおひろめコンサートもDDRより、バッハゆかりのライブチックヒ聖トーマス教会の生んだ世界的奏者ハンネス・ケストナーによって、三夜連続で行われました。

DDRというとなじみのない国のように思われていますが、こう考えてみると、信州の田舎街松本市も、音楽等を通じて結構交流がはじまっているのです。私達日本DDR友好協会連絡会議長野県中信支部は、この、アンチエ、ワイトハースさんのバイオリンリサイタルを機に、さらに社会主義の国DDRとの文化、学術、労働の交流を深めたいと考えております。

(日本DDR友好協会連絡会議 長野県中信支部事務局長 中澤秀行)

九月九日に全労協準備会結成大会

「四原則」「三方針」を組織原則とする「全労協」(全国労働組合連絡協議会)は九月九日、全労協準備会結成大会を開く。場所は国労会館八階ホール。この準備会結成大会では(1)「基調と目標」「綱領」「規約」、(2)「当面の課題と正式結成の日程」、(3)「役員体制」「予算」等が提案される予定だ。

全労協結成準備会への正式加盟は、各組合の機関決定を前提とする。労戦再編成が必至の状況となった現在、社会党左派系の動向が問われる。「全労協」はその根拠地の役割を果たす。オブザーバー、傍聴希望組合の積極的な役割をよびかけたい。

これからの労働者運動の展望を示す！
号外「われら今、何をなすべきか」
—都議選、参院選の総括と展望—
ぜひご購読を 八月下旬発行、予価三〇〇円

多くの読者から、都議選、参院選の結果をどうみたらいいのだろうか。どのように総括し、展望を切り拓けばいいのだろうかとの声が寄せられています。編集子の思いも同様です。

こうした読者の声に真正面から答えたのが「われら今、何をなすべきか—激動する情勢に立ち遅れるな」(本誌第四一〇、四一一号)、そして「続・われら今、何をなすべきか—『周辺部』の反乱を『基軸部』へ」(本誌第四一二、四一三号)の坂牛論文です。前者は都議選、後者は参院選の全面的総括です。そして今、大きな反響をよんでいます。

二つの選挙—この端初を開いたのが新潟の仲間ですが—総括は、労戦再編問題もからみ、激動する労働運動の展望を明らかにする上で、避けて通れない大きな課題です。

そこで、社会通信社では坂牛論文を中心に号外「われら今、何をなすべきか—都議選、参院選総括と展望」(仮題)を発行することにしました。発行は八月下旬の予定です。詳細については、次号で紹介します。読者諸氏の積極的なご活用を願ってやみません。

なお、号外として発行いたしますので、ご購読希望の方は、社会通信社まで一報くださることをお願い申し上げます。予価は三〇〇円です。

「ヤルしかない」⑪ 「全労協」を統制する?!

党大会決定違反だ!

党が、ただけない通達を出した。「全労協」等行ったり、それをあおったりする者は、統制に付す」という趣旨になっている。その出どころは、労戦対策特別委(田辺委員長)で、労働局(田淵局長)も併記してある(六〇/一九付)。本誌八月一日号にも全文掲載されているが、標題は「労働界全体の統一にむけての党の対応について」となっている。

しかし、私も党大会(五四回)に出たが、そのような方向付けにはなっていない。議事録を見ると「連合へ行かない組合や行けない組合の黨員については、今後とも党と労働組合の協力関係の中で維持していく」とはっきりしている。すなわち、当然のことだが各組合の自主的決定を党も尊重する、ということだ。そのことが主要で、その上に党との支持協力関係が確立されてきたのだ(弁証法)。この法則は百年以上の歴史を積み上げている。逆に、共産党のように党と労働組合を「自由化」し(その逆は「懇」のように「硬直化」し)ていくと票に結実しないし、中国の自由化などはついに「自由の女神」まで持ちだし流血をもたらした。

さて、通達にもどるが、党が「積極的に推進」している「連合」ですら、「政党支持については、加盟組織の判断に委ねる」とあるから、ナショナルセンターにおいては、なお尊重されなければならない。「綱領」にいたっては、「労働組合の主体性の堅持につとめ、外部からのあらゆる支配介入を排除」と打ち出している。田辺氏よ、あんな通達を出すとは「支配介入」だと、連合から怒られますよ。なおよくないことは、この通達は、「党支配や黨員協」を督励していることだ。

なお、通達内容は労働運動等の真実を伝えていない。その一つは、連合は「力」によって運動をすすめることある。「強化」「強力」に、ともある。しかし、向うとの闘いに、ほとんど「力」を発揮してないではないか。昨年の春闘のとき、何と経企庁などが、好況だし、前年までの「積みこし」もあることから、七割ぐらいは賃上げすべきだと、「励まされた」のであるが、連合は、やはりストなし春闘でたった四・四%に終ってしまった。そして今年、経常利益六八%という史上空前の「平成景気」なのに、連合は、まず要求そのものが史上二番目の低さ、そして、昨年よりはたったの一、七七四円(〇・七二%)しか上げ得なかった。労働条件に至っては「意に反する労働」(憲法一八条・ILO一〇五号条約違反)の一大旋風ではないか。

通達よ、「力」を、五七カ月以上も連続大もうけをしている日本独占に駆使してくれないか。労働者や黨員に圧「力」をかけていないで……。

二つ目は、「組合民主主義」を守れと説論しているが、一体、連合を推し進める過程は民主的だったのだろうか? 宇佐美氏ら六人委の秘密会議(八〇年九月)での少数意見排除↓差別の密議、それと相乗しての富塚氏の外堀埋める方式での総評解体、山岸氏らの民社等との百鬼夜行、真柄氏の少数意見排除↓差別のために「毅然として対処」という超非民主ぶり、日教組等を思想検査等とする連合中枢……などから始まり、民間体質からくる破廉恥問題などからゴルフ・宴会労働運動にいたるまで、その非民主、非組織性はひどいものである。とくに田辺氏の国労分裂の秘密会議(八六・一二・一八)から安保・自衛隊等の領導に至るまで、党の民社党化の病巣に陥っているではないか。クリーン・ハンドの原則を言いたい。

(佐々木 守雄)

◇ 読者からのおたより ◇

選挙結果は当然のこと さて、七月二三日投票の参議院選挙で自民党が惨敗し、新たな政治状況がつくり出されました。これは当然の結果と思います。国民も良くみていて生活の場から自民党政治にノーと意思表示をしたものであると思います。

この選挙結果は当然であると思うのは、第一に、自民党政治が長く続き、政官財の癒着がひどく、自民党とのパイプだけで利益誘導の政治を行うことができるようになっていたことです。それがリクルート疑獄として摘発されたのです。すでに議会制民主主義は形骸化して、弱い者の要求が反映されなくなっていたのです。

第二に、こうした背景のなかで、強引な大衆課税としての消費税の導入が強行されました。資本の論理にもとづいた効率性しか考えられず、弱い立場の中小企業と低所得者に配慮する気持を持ち合わせていないのです。

第三に、農業解体政策です。大企業本位の自民党からすれば工業立国として工業製品を輸出し、原材料と食糧を輸入する基本戦略は明らかにされてきました。農業を切り捨てて都市労働者に支持基盤を移そうとしてきていました。しかし、食料は世界的な気候異変と地域環境を守る立場からみて保護されるべきものと考えています。

以上の問題意識から自民党の惨敗は当然の結果と考えますが、大資本からの反抗は強まるものと思います。次の衆議院選挙でも自民党に負けず、まともな労働運動の前進をめざそうではありませんか。その力をもって昭和電工闘争の勝利をかちとうではありませんか。

(千葉・N)

貴誌をよりどころに 国鉄を退職した今、貴誌を唯一のよりどころとして、労働運動や政治情勢をみつめています。このたびの参議院選挙の大勝利は最高の気分ですが、「連合」が政治の場に一定の勢力をもったことは、社会党の将来に大きな不安を感じます。国鉄問題の参議院付帯決議は有利に展開されるのか。これも不安の一つです。 (名寄・S)

社会主義インターの原則をどう評価 「社会新報」八月一日付のつた社会主義インターの原則に関する宣言をどう評価(批判的見解)すればいいのか、教えてください。文面を見るだけでは、スナナリ受け入れてしまいます。「新宣言」の時もそうでした。今回の選挙でも消費税をはじめとする「三点プラス」がマスコミでは大きくとりあげられました。社会党の選挙にかかわってきた人の中でも様々な課題(女性差別、障害者差別、環境・原発etc)で運動してきた人達があります。これまでの職場・反合理化闘争ではつかみきれなかった課題と運動があります。社会党の右傾化と基本政策をまげようという動きには反対ですが、幅広く多様性もあっていいのではと思うのです。労戦統一に関しての今回の社会党の中執決定は納得できません。日本共産党の労組のひきまわしが産別会議の時にあったと聞きますが、それとの違いがわかりません。

(山形・S)

闘いを大きく 都議選、参院選の自民党の大敗、社会党の大躍進。それらの結果が労戦等に及ぼす影響はどうなるのだろうか。また一月二二日の総評解散大会を意識した各単産・単組の大会など、全国の労戦をとりまく状況は大きく動いています。そういう意味で情勢の認識を一致することが、今一番問われています。結果は闘いとおして広がります。

現在の状況のなかでの闘いの柱は、国労の清算事業団闘争があげられます。それは、この闘いが国民の基本的権利の問題（七月七日「毎日」社説）であり、日本の民主主義の問題（七月二日「朝日」記事）であるからです。この闘いへのとりくみの姿勢が本物の労戦統一の未来を代表します。この秋が大きな山場となります。闘いを大きく盛り上げましょう。

（国労・O）

日教組も！ 日教組もいよいよ自治労の二の舞となりつつあります。それにしても日本共産党と右の懲りない面々にはどうしようもありません。

（日教組・K）

あらゆる分裂主義から

六〇万日教組を守りぬこう

まだ可能性はある

七月一日、日教組中央執行委員会は、九月初旬の日教組定期大会で、新「連合」への加盟を前提に、「統一準備会」へ参加する方針を提案することに、とうとう踏み切った。総評解散・新「連合」発足という事態は、まぎれもなく右翼再編（選別・吸収合併）であり、日教組六〇万が産別統一組織として、その「統一と団結」「闘う路線」を守るには、「連合不参加」の態度を確立するしかない、と私達が主張してきたにもかかわらずである。

日教組執行部の「連合」への屈服には憤りを禁じ得ない。しかしながら私達は、九月大会まであきらめるわけにはいかない。統一準備会への参加を決めるのは、「日教組執行部」ではなく、私達「日教組組合員」、具体的には「各県・高教組からの大会代議員」である。執行部に、日教組六〇万の「統一と団結」への責任をきちんと果させるためには、私達が組合民主主義を徹底的に追求していくしかない。

「連合不参加」の方針を掲げている県・高教組は三五以上に達する。様々な障害・困難があろうとも、励まし合いながら、これらの県・高教組を結集していく努力をねばり強く続けていくことである。「統一準備会」参加の方針を否決しないし保留させる可能性はまだ残っている。日教組執行部が、いくら無視しようとしても無視することができないだけの「反連合」勢力の力、組合民主主義の健在ぶりを大会で見せつけなければならぬ。

こうした意味で、全国的結集の中核的な立場である千高教組の役割が、今ほど重要な時はない。重責を担って横堀書記長は、この正念場に、文字通り死力を尽くしている。

ついに「全国連絡会」（分裂組織）の結成集会が！

しかしながら、一方で統一労組懇話会の県・高教組は、この千高教組の努力が「水泡に帰す」ような分裂策動を本格化し始めた。前号で既報した、六月一〇日の七県教組五高教組による「ナショナルセンター確立と結びつく教職員組合運動構築のための大結集」の呼びかけをさらに発展させ、七月三一日に「教職員組合全国連絡会」の結成集会が開催されることとなった。

憂慮されていた事態が急ピッチで進行している。九月大会を待たずに、「日教組の伝統も誇りも投げ捨て、連合に屈服した」「団結の道を、みずから投げ捨てた」と日教組指導

部に見切りをつけ、同時に日教組内での組合民主主義の追求も放棄して、「新たな産別結集」(分裂組織)作りに着手し始めたのである。

統一労組懇は九月大会を欠席してはならない

現在、焦眉の課題は、「九月日教組大会に統一労組懇系の県・高教組を出席させること」にある。「どうせ出席しても連合参加が決まるのだから、出席しても無駄。出席するとなれば、それまでの組合費を上納しなければならぬ。連合に行く日教組にわざわざ組合費を払ってやる必要はない。出席する見込みは、八、九割ない」という声がささやかれているが、とんでもないことだ。

一月、新「連合」発足前に共産党・統一労組懇は「階級的ナショナルセンター」の旗上げをする。その時に、分裂している自治労から参加してくる部隊があるのに、日教組からどこも参加してこないのは格好がつかない、というのがホンネらしい。そこで、日教組が連合参加を決めようが決めまいが、いくつかの県・高教組は、「いかなる事態になっても」一月までに日教組を割つてでも、自分達のナショナルセンターに参加させる方針を共産党指導部が立てたようである。

こうした党利党略で、日教組の「統一と団結」が崩されるのは、とうてい容認できるものではない。分裂主義は徹底して批判されなければならない。特に今、大衆的に批判の声を集中すべきは、九月大会までの努力を早々と放棄し、日教組の組合民主主義を、すでに見限りつつある彼らの態度に対してである。

組合民主主義の追求を

日教組指導部を批判するのはいいだろう。しかし、それがなぜ組合民主主義の追求を放棄することにつながるのか。

統一労組懇の人達は、国労の修善寺大会を大きく評価している。とするならば、あの場で国労組合員が見せた「組合民主主義への信頼」を見習うべきである。大会前には劣勢と言われた「労使共同宣言拒否」勢力が、大会討論で他を圧倒し、その気概、迫力が多数派を形成していったのだった。統一労組懇が出席さえすれば、日教組大会でも可能性はある。今こそ、統一労組懇の人達は、自らの党利党略のためではなく、六〇万日教組組合員に誠意を尽す(日教組の「統一と団結」「闘う路線」を守る)ために、精一杯奮闘すべきである。

日教組が分裂して、ひとり千高教組だけが無傷でいられるわけがない。日教組の分裂は職場の分裂を招く。そのことは、自治労の深刻な事態を直視すれば、明らかである。一方での、自治労中央本部の「連合参加」表明、他方での、統一労組懇系組合の「全国連絡協」結成・自治労中央本部への組合費上納ストップが、自治労を分裂状態に陥らせ、組織戦争に嫌気のさした組合員が次々と組合から脱退している。

何としても、この愚を繰り返してはならない。幾多の困難が待ち受けているのは承知である。しかし、あらゆる分裂主義から日教組を防衛することに、すべての英知・努力を傾けなければならぬ。九月大会で「連合不参加」を勝ち取るために、引き続き全力を集中しよう。

(「千葉教育労働運動通信」より転載)